

日本語学習者の「のだ」文について

——中国語母語話者の「のだ」の解釈を中心に——

君村千尋（筑波大学大学院生）

要 旨

日本語学習者の「のだ」文の解釈について、本稿では特に〈前置き〉の「のだ」の用法を取り上げて質問紙調査を行った。その結果、後続文の先触れの働きをする〈前置き〉の「のだ」が、中国語母語話者には〈強調〉の意味合いを持つものと解釈されていることが明らかになった。また、フォローアップインタビューから、「のだ」文は〈丁寧さ〉を表明するための用法であると誤認している学習者が多いことが分かった。これらにより、「のだ」の不適切使用には「のだ」文の解釈の誤りとそこから生じるポライトネスの異なりが関係していることが示唆された。

キーワード：「のだ」文、「のだ」の不適切使用、〈前置き〉の「のだ」、解釈の異なり

1. 問題の背景

日本語の学習項目の一つである「のだ」文は、場面に応じた適切な運用の習得が容易ではないとされており、上級レベルになってもその使い分けに戸惑う学習者は少なくない。現在の日本語教育シラバスでは、初級の段階で「のだ」の基本的な用法（「説明」・「解釈」・「前置き」・疑問語疑問文の「のだ」）が提出されるのが一般的であるが、それに従い用法説明どおりに使ってみるものの、「何だかうまく使えない」「適切に用いているかどうか自信がない」といった声がよくきかれる。

「のだ」はその意味・機能や分類においていまだ未解明な点があり、共通認識が得られていないことや「のだ」文と非「のだ」文との意味的な違いが微小で説明が困難であるために、教師にとっても指導の難しい文法項目である。一方で、近年では日本語教育の重点が文法中心からコミュニケーション中心へとシフトするのに伴い、「のだ」を積極的に教えるか否かの意見が分かるといった向きもみられる。しかし、菊池（2006）も述べているように「のだ」文には、「のだ」が有する関連付けの機能から生じる話のナビゲーション的な役割があり、「のだ」を欠いた文では情報の軽重や話の方向性が聞き手に伝わりにくい。そして、何より「のだ」の使い分けにおける学習者の関心の高さや実際に話されている日本語が話したいといった学習者の要望にこたえるためにも「のだ」習得のための手がかりをさぐる研究は需要があると考えられる。

2. 「のだ」の先行研究

「のだ」は、日本語学の分野における意味・機能については夥しい数の研究の蓄積があるが、日本語教育に応用できる研究というとそれほど多くはなく、古川（2005）や今村（2008）、藤城（2010）の「のだ」表現の導入・指導の改善を提言する論考や学習者の「のだ」の使用実態について述べた塚原（1998）、塚田（2000）、趙（2008）などがわずかにあるのみで

ある。それらの中には「のだ」の使用あるいは不使用条件を見出すことを目的とする研究が散見されるが、「のだ」の使用あるいは不使用場面を提示し、教育に役立てようとするアプローチには限界があるといわざるを得ない。なぜなら、ある文脈において「のだ」文も非「のだ」文もどちらも言えるが、伝わるものが違うといったようなケースが少なくなく、こうした観点から行う文型導入・文法解説は学習者が把握しきれないほど煩雑になってしまうからである。

一方で、名嶋（2007）が述べているように、「のだ」文は命題内容そのものではなく、その内容を話し手が聞き手にどう提示するかといった提示の仕方に関わるという点において、「のだ」は極めて語用論的な文法要素であるということは近年広く知られるところとなってきたように見受けられる。こうした成果を受けてか、社会言語学の分野においてもいくつかの研究がある。京野（2014）は「のだ」文に対する母語話者の印象評定を行い、「のだ」文には聞き手との距離の近さや親しみ、熱心さなどの感情を重視した伝達態度が含まれることを明らかにしている。また、市村（2014）は、母語話者の話し言葉コーパスを対象として「のだ」文がどのように使用されているかを調査した結果、「のだ」形式は、親疎・性差に関わらず使用されるとし、「のだ」文の使用は、聞き手を積極的に参加させながら談話を展開する聞き手配慮の伝達方略であると結論付けている。

以上のように、日本語学習者の「のだ」文の適切な運用には、意味的な特徴や「のだ」が用いられる文脈や場面などの語用論的要因を考慮するとともに、発話者の伝達態度や聞き手への提示の仕方なども関わってくることを明示する必要がある。本稿では、「のだ」文の使用に関して従来から指摘されている前後の文脈や背景を考慮してもなお、学習者に誤用が生じてしまうメカニズムについて考察したいと考える。

3. 日本語学習者における「のだ」の問題

3.1. 「のだ」の誤用

日本語学習者の「のだ」の誤用を大別すると、不適切使用と非用の二つに分類される。以下に挙げる例文はいずれも実話（あるいは実際のメール）である。

- (1) どうして急に帰国しますか。
- (2) 日本語のチェックしてもらいたのですが、直していただけないでしょうか。
- (3) （忘れ物の問い合わせ）
昨日そちらで食事をしましたが、手帳の忘れ物はありませんでしたか。
- (4) （調査協力の依頼）

こんにちは、2年の（名前）です。先月言ったと思いますが、調査の協力をお願いしたいんです。9月2日まで、（依頼の相手）さんはいつか学校に来るんですか？

例文（1）（2）（3）が非用、（4）が不適切使用の誤用と捉えられる。本来なら「のだ」を使用すべきところで「のだ」が用いられていない（1）（2）（3）のような非「のだ」文は、冒頭で述べたように情報の軽重や話の方向性が伝わりにくく、「のだ」の非用として小さからぬ問題があるが、本稿では後者の不適切使用における「のだ」を取り上げたい。その理由は、「のだ」の不適切使用は、場合によっては相手に誤解やよくない印象を与えてしまい、

話し手の用件が聴き手にスムーズに聞き入れられない可能性が生じるという点で非用よりも誤りの重みが大きいと考えるからである。

3.2. 学習者の「のだ」文使用の背景

2016年1月～7月にかけて、茨城県のT大学において筆者が行った「のだ」の産出調査⁽¹⁾およびフォローアップインタビューにより、学習者の「のだ」の使用には、無意識のものと何らかの含意を意図した意識的なものがあることが分かった。日本語でのやりとりにおいて普段から「のだ」文を用いるか否かは学習者の個人差が大きいですが、これまでJFL環境にあり「のだ」を聞いたことも使用したこともなかった日本語学習者でも、来日し、JSLとして運用する期間が長くなるにつれ、次第に無意識に「のだ」文を話すようになる傾向が一般に見受けられる。一方で、「のだ」文に何らかの意味を含意させて、意図的に「のだ」文を用いている学習者も少なからずみられた。国籍別では、中国語母語話者にその傾向が多くみられることも分かってきた。これらは、中国での学習経験や使用教科書の影響によるものと考えられるが、ここではある調査を取り上げる。

下記は、田(2013)による中国語母語話者の学習者(N2レベル)を対象とした言いさし文の理解に関する調査である。このアンケート結果では、学習者にとって言いさし文の理解が困難であることが示されているが、言いさし文のみならず「のだ」文の意味を誤解している学習者が多いということも示唆されるのではないだろうか。

P: このコロッケ、ジョンさんが作ったんですか。せん

Q: ええ。料理の本に書いてあるとおりに作ったんですが。

P: とてもおいしいです。

Q: ああ、よかった。

質問:Qさんは、「ええ。料理の本に書いてあるとおりに作ったんですが」では何を言いたいですか。

回答は以下の通りである。

表1 「言いさし」の「けど」類に関する調査の回答者と割合

美味しいかどうか分からない。	6人(26%)
ええ、わたしが作ったんだ。	10人(43%)
わたしは料理がまだまだなんだ	3人(13%)

(田2013 P46)

Qの「料理の本に書いてあるとおりに作ったんですが。」は言いさし文であると同時に〈前置き〉の「のだ」文⁽²⁾でもある。〈前置き〉の「のだ」は、後ろの文を関連付けるという機能から話し手(書き手)の意図を受け手にスムーズに伝えるという働きを持つ。〈前置き〉の「のだ」の場合、重要な情報は「のだ」文の後に現れるため、受け手は「のだ」文が関連付ける対象を知ろうとして後続文への関心を高めるのだが、後続文が省略されている言いさし文においては、Qの「言いたいこと」は以下のように幾通りにも考えられよう。

(5) 料理の本に書いてあるとおりに作ったんですが、美味しいかどうか分かりません。

- (6) 料理の本に書いてあるとおりに作ったんですが、ちょっと自信がありません。
- (7) 料理の本に書いてあるとおりに作ったんですが、よかったら食べてみてください。

後続文が省略されている言いさし文では、話し手の発話意図は受け手の想像力に委ねられることになるが、この文脈において発話される「作ったんですが…」が伝えようとしているのは、話し手の謙虚な態度ではないだろうか。それを「わたしが作ったんだ」と受け手が解釈しているとしたら、話し手の〈言いたいこと〉は全く伝わっていないことになる。この質問で、「ええ、わたしが作ったんだ」という誤答が正答を上回って多く選ばれたのは「作ったんですが。」で用いられている「のだ」を〈強調〉の「のだ」と解釈したからだと考えられる。このように、日本語学習者（特に中国語母語話者）には〈前置き〉の「のだ」文が、発話者が意図したように理解されていないことが推測される。

3.3. 〈前置き〉の「のだ」

3.2 節で述べた「のだ」の産出調査では、日本語学習者と日本語母語話者とは「のだ」の使用傾向に差異が見られた。調査内容は「研究計画書についてアドバイスを依頼する」「レストランに忘れ物の問い合わせをする」「ランチ会の出欠連絡を依頼する」といった用件を疎の相手にどのように伝えるかというもので、ロールプレイにより産出された発話とそれと同じ内容を伝える文章（メール）を調査データとし、談話と文章、および学習者と母語話者とは「のだ」文の使用にどのような違いが見られるかを比較した。

その結果、日本語母語話者が用いた「のだ」のほとんどは「～んですが」という形式であり、事情を説明する際の〈前置き〉の「のだ」が1談話につき1～3回程度用いられていた。そして、このテーマにおいては、〈説明〉や〈解釈〉、〈強調〉や〈言い換え〉等の「のだ」は見受けられなかった。また、同じ内容を文章（メール）で伝える場合、「のだ」はほとんど用いられないことが分かった。一方、学習者の「のだ」の使用は、個人差はあるが母語話者よりも多く、1談話に何度も見受けられた。談話・文章ともに、言い切りの形式（「～んです。」）で用いられることが多く、中には違和感を覚える「のだ」文⁽³⁾もあった。また、それらの「のだ」文は〈説明〉や〈強調〉の意味合いを含ませようとして、話し手（書き手）が意図的に用いていることがフォローアップインタビューから判明している。

この他にも、魏（2012）は「のだ」の理解と産出における調査で、中国語母語学習者にとって〈前置き〉の用法が数ある「のだ」の機能の中で最も理解しにくいことを明らかにしている。

このような調査・研究結果から中国語母語話者が用いる「のだ」の中でも、特に〈前置き〉の「のだ」に関する理解が乏しく、母語話者とは異なる解釈があることが推測される。

4. 中国語母語話者の〈前置き〉の「のだ」の解釈に関する調査

4.1. 調査概要

筆者は2016年10月、茨城県T大学において、中国語を母語とする日本語学習者25名とその他（エジプト、ロシア、ウズベキスタン、カザフスタン、韓国、ベトナム、インドネシア、アゼルバイジャン、オーストラリア、ドイツ）の出身の日本語学習者15名を対象

に「のだ」の解釈を問う質問紙調査を行った。調査協力者の日本語レベルは上級から超級で、滞日期間は数週間～2年である。

4.2. 調査の内容と結果

調査内容は、〈前置き〉の「のだ」文が含まれた会話を提示し、その「のだ」文の発話者の気持ちを選択肢の中から選ぶというもので、回答者が「のだ」文をどのように解釈しているかを量るものである。以下に、質問内容と結果の一部を挙げる。

質問① 先生と学生 A の会話です。

学生 A の言葉「昨日の 3 時頃、おうかがいしたんですが…。」に最もふさわしい A の気持ちは ア、イ、ウ のどれですか。

- ・ 昨日、A は先生の研究室で打ち合わせをする予定でしたが、先生に会えませんでした。

先生: A さん、昨日わたしの研究室に来ませんでしたね。
 学生 A: いいえ、昨日の 3 時頃、おうかがいしたんですが…。
 先生: そうでしたか。知りませんでした。ごめんなさい。

ア: 確かに先生の研究室に行った。

イ: 先生の研究室に行ったかどうか自信がない。

ウ: 先生はいらっしゃらなかった。

3 つの選択肢のうち、正答とされるのはウである。「昨日の 3 時頃おうかがいしたんですが…」の言いさし文は、復元するとしたら「おうかがいしたんですが、先生はいらっしゃいませんでした」となる。言及しづらいことを避けるために言いさし文を用いている例である。選択肢アは学習者がこの場面における「のだ」文を〈強調〉と捉えることを想定して用意したダミーであり、選択肢イは、言いさし文の別の解釈（自信の無さの表明など）を想定して用意した。表 1 に学習者の回答結果を挙げる。

表 2 日本語学習者の〈前置き〉の「のだ」の解釈における調査結果①

	中国語母語学習者	その他の学習者
「確かに先生の研究室に行った」	14 人 (56%)	7 人 (46%)
「先生の研究室に行ったかどうか自信がない」	0 人	0 人
「先生はいらっしゃらなかった」	11 人 (44%)	8 人 (54%)

この会話場面における〈前置き〉の「のだ」は、言いさし文になっている分だけ、より理解が困難だったとみえ正答率が低くなっている。予想された通り、「確かに先生の研究室に行った」という誤答が半数以上あり、当該の文に「のだ」が付加されていることにより強調の意味合いが含まれていると解釈したことが推測される。

級日本語における教育文法で提示されている（庵 2001:289）ものと異なる解釈があるといえそうである。

5. 結果の考察—フォローアップインタビューより

以上の調査結果から、中国語母語話者は〈前置き〉の「のだ」が用いられた文を母語話者とは異なって解釈しているということがいえる。

〈前置き〉の「のだ」文に強調の意味合いがあると回答した学習者にフォローアップインタビューを行ったところ、「のだ」文は非「のだ」文よりも自らの依頼の強さを表明できる、というコメントが複数あった。さらに、「お尋ねしたいんですが、」のほうが相手に対して丁寧な表現であると解釈している学習者もあった。「のだ」文のほうが丁寧である、という回答は前回の産出調査の際にも多くきかれ、依頼の際に「のだ」文を連発するといった例も確認されている。

一方で、中国語の会話であれば強調の意味合いを含めて話すのが日本語会話でそれを行うと失礼になるので、という理由から正答を選んでいる学習者もあった。中国語では、このような発話場面において強調の意味合いを含めて話すことが一般的であるとしたら、いわゆる解釈における母語の転移である可能性も考えられる。

以上をまとめると、「のだ」の不適切使用は、「のだ」文の解釈の誤解と「のだ」を使用することが丁寧さに繋がるという日中のポライトネスの違いが複雑に絡み合っているということが考えられる。

6. 日本語教育への提言

冒頭で述べたように現在の初級日本語教育のシラバスでは、数ある「のだ」の用法の中の〈説明〉の「のだ」、〈解釈〉の「のだ」、〈疑問語疑問文〉の「のだ」、〈前置き〉の「のだ」が一般的な学習項目となっている。〈説明〉の「のだ」や〈疑問語疑問文〉の「のだ」は比較的理解が容易で、特に〈説明〉の「のだ」文は学習者の運用率も高い。

一方で、〈前置き〉の「のだ」は、学習者の認知が低く、本稿で主張したように意味の解釈にも誤解が見受けられる。それには次の要因が考えられる。

〈前置き〉の「のだ」を導入する際に用いられる例文は、多くの場合「ちょっとお尋ねしたいんですが、～を教えてくださいませんか」等の依頼文で、この形式が大変丁寧な表現として説明される。この文型導入により、「～んですが、」自体が丁寧な表現形式であるという誤った認識を学習者が持つてしまうのではないだろうか。また、中国語には日本語の「のだ」文に対応する「是・・・的」という形式がある（杉村 1982）。杉村によれば、「是・・・的」は、「のだ」同様、因果関係を表す働きがあるが、状況説明的な環境に置かれた「是」は、「本当に～だ／～に違いない」といった語気を強く示す傾向があるという。このような対応する形式における用法の微妙な違いが「のだ」文の解釈の誤解に影響していることも予想される。これらの点を考慮し、誤解が生じないように〈前置き〉の「のだ」自体の意味を正確に解説することや対応する中国語との意味の差異を取り上げて提示することが求められるであろう。

既存のテキストにおける問題点としては次の点が指摘される。一般に初級テキストでは

自己の都合や理由などを説明する場面で「どうして授業を休みましたか—お腹が痛かったんです」といった言い切りの形式「～んです」が例文として提示されるが、母語話者の実際の発話を記述してみると、実はそのようには話していないことが分かる。実際に発話されている「のだ」文は、「～んだけど…」といった言いさしの形式や「～んですが、～ですか。」のように質問する際の前置き表現としての用法がその大半を占めているのである。「～んです。」という言い切りの形は、依頼場面などにおいては押しの強い印象を相手に与え、本人は丁寧さを表明するつもりで用いていたのに、逆の効果をもたらしてしまうこともある。こうした点を特に上級、超級の学習者には運用の際の注意点として喚起することが有効となるであろう。

7. 今後の課題

今後の課題を以下にまとめる。

まず、今回行った調査の対象者は日本語学習者のみで、母語話者に対しての調査は行っていなかったため、質問の正答に対する根拠は日本語文法を拠りどころとしたが、はたして母語話者の実際の回答は日本語文法の規範通りになるのだろうかといった疑問が残る。よって、母語話者に対しても同様の調査が不可欠である。

次に、「会話場면을提示し、「のだ」文を用いた話し手の気持ちを推測する」としたこの調査形式では、調査協力者が正答を選ぶ際に「のだ」文以外の文法や発話場面等を選択の判断材料とした可能性も否定できない。したがって、「のだ」の意味の解釈に焦点を当てるためには、「のだ」文と非「のだ」文とを比較した調査内容に変更するなど、調査紙の改善が求められる。

最後に、学習者が頻繁に用いる言い切りの形式の「のだ」文（「～んです。」）が依頼をはじめとする配慮の必要な場面に用いられるとき、それらが母語話者にどのような印象を与えるのかといった調査も行っておく必要があるだろう。

8. おわりに

「のだ」文をどのように指導したら学習者が適切に使用できるようになるのか、という課題は長年研究されているものの、これという決定的な解決案はまだみられない。自然習得されるもの、という回答では「のだ」の運用に疑問を抱える学習者を納得させることはできないであろう。

今回の調査にあたり、思いがけず耳にした忘れられない学習者の「のだ」文がある。

筆者： すみません。あの、アンケートにご協力いただきたいんですが…。

学習者：いま、授業に遅刻するんですよ。（と、足早に去る）

「遅刻するんですよ」と答えた学習者に発話意図はあったのだろうか。もしあったならば、どのようなものであったのだろうか。授業前にアンケートなど頼まれても困る、という自らの不快な気持ちを表明するつもりであれば、場面に適切な「のだ」文といえる。しかし、「遅刻する」という状況を強調して説明することで丁寧さを表すつもりであったなら、それは誤った「のだ」の使い方になるだろう。日本語学習者の「のだ」文の運用に関する興味は尽きない。

注

- (1) 調査協力者は上級～超級の日本語学習者 13 名（国籍：中国、韓国、インド、タイ、エジプト、ウズベキスタン）と日本語母語話者 10 名で、「研究計画書のチェックを依頼する」「忘れ物の問い合わせをする」「ランチ会の出欠連絡を依頼する」といった依頼・問い合わせ場面において、どのような「のだ」が産出されるか談話と文章の両面から調査を行った。
- (2) 〈前置き〉の「のだ」の分類および名称は、庵ほか（2001:289）に従った。後続文が省略されている言いさし文を〈前置き〉の「のだ」とするのには異議も唱えられようが、「のだ」が言語のみならず周囲の状況をも関連づける性質も持っていることから、本稿では〈前置き〉の「のだ」と捉えている。
- (3) 違和感を覚える「のだ」には、（忘れ物の問い合わせ場面で）疎の関係にある相手（店員）に「家に帰ってから、手帳が見つからなかったんです。」と述べたり、（論文チェックの依頼場面で）「ご意見をいただきたいんです。 もしいただければ、大変ありがたいです。」（メール）といった運用が挙げられる。これらはいずれも母語話者の日本語には見受けられない「のだ」文であるとして、「のだ」の誤用と捉える。

参考文献

- 庵功雄ほか（2001）「23 関連付け」『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク 282-298
- 庵功雄（2013）「たかが「の」、されど「の」受難の「んです」を救い出すために」『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版 25-34
- 市村葉子・堀江薫（2014）「「のだ文」を用いた日本語母語話者の伝達方略—話し言葉コーパスの分析に基づいて」『第 16 回日本語用論学会大会発表論文集』9 号日本語用論学会 1-8
- 今村和宏（2008）「「のだ」の発話態度の本質を探る —「語りかけ度」と「語りかけタイプ」—」『一橋大学留学生センター紀要』10 一橋大学留学生センター 37-48
- 菊地康人（2006）「受難の「んです」を救えるか」『月刊日本語』35-12
- 魏 秀婷（2012）「JFL 環境での中国人日本語学習者の「のだ」の習得—理解と産出の 2 面から—」『言語文化と日本語教育』44, お茶の水女子大学日本言語文化学会, 66-67
- 京野千穂（2011）「談話におけるノダ「非使用文」の条件と機能」『同志社大学日本語・日本文化研究』第 9 号 1-16
- （2014）「対話における文末の非ノダ文・ノダ文が示す話者の伝達態度:日本語母語話者の印象評定の量的調査から」『社会言語科学』17 (1) 社会言語科学会 114-125
- 杉村博文（1982）「「是・・・的」—中国語の「のだ」の文—」寺村秀夫ほか（編）『講座日本語学 12 外国語との対照Ⅲ』明治書院 155-171
- 田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 趙萍（2008）「中国人日本語学習者における「のだ」「のか」の習得」—使用条件と非使用条件をめぐって—『日本語教育』137 11-20
- 塚田智冬（2000）「日本語学習者の話しことばにおける〈ノダ〉の使用の一考察—「納得・発見」「問い返し」の場合—」『国際交流基金 パンコック日本語センター紀要』3

- 塚原真紀（1998）「日本語学習者の会話における「ノダ／ンデス」の使用実態に関する一考察
『筑波応用言語学研究』5 71-84
- 田昊（2013）「「言いさし」の「けど」類の使用実態に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』156, 45-58
- 名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 藤城浩子（2010）「ノダの提示方法に関する一案—メタファーを用いた意味・機能提示」『日本語／日本語教育研究』1 日本語／日本語教育研究会 ココ出版 67-84
- 古川由理子（2005）「初級における「のだ文」指導の一試案」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』3 67-78

（君村千尋 筑波大学大学院生 chihirokimi.217@gmail.com）